仁科浩二郎先生を偲んで

（京都大学）三澤 毅

仁科浩二郎先生のお名前を初めて拝見したのは大学 2 回生のとき、仁科先生が翻訳されたラマーシュ著の「原子炉の初等理論」を教科書として購入したときでした。この教科書を用いた講義で炉物理の面白さを知り炉物理の分野に進み現在に至っています。大学院生の頃は学会や研究会等で仁科先生を存じ上げておりましたが、直接しっかりとお話をさせて頂いたのは博士課程のときに名古屋大学原子核工学科の助手の公募に応募し名大の研究室に伺って仁科先生と山根義宏先生との面接を受けたときでした。事前に渡された論文の要約と現在の研究内容についてかなり緊張してプレゼンを行ったのですが、仁科先生から様々な厳しい質問を受け、それまでの実験中心の炉物理ではない新しい炉物理とその見方を知ることになったと思ったものの、これから仁科研でやっていけるかなという不安な気持ちになったのをよく覚えています。

名大で助手に採用して頂いた後、研究室での学生中心として廻る日常生活はとても楽しく有意義なものでした。毎週行われる学生が研究状況を発表する研究会、学生や職員が順番に最新論文の要約を報告するサーベイ会、スケジュールや連絡事項を確認するお茶会がありました。研究会での仁科先生はご自身が納得されるまで質問を続けられることが多々あり、仁科研出身の方はよくご存じのスタンディング研究会（学生が黒板など使って研究内容の説明するものの仁科先生が納得されず、学生はいつまでも黒板の前に立たされて続けられる研究会）は仁科研らしいものだったと思います。また時には先生が悩んでしばらく考え込むということもありました。私などは学生の前では説明や質問をするときに黙って考え込む姿をあまり見せたくないという小心者ですが、先生はそのようなことは全く無く、あくまでご自身が理解されることが重要と考えておられたと思います。

仁科先生は京大の臨界実験装置 KUCA の設立準備にも大変ご尽力なさり、国内で現在も炉物理実験を行うことができるような体制の礎を築かれたと思います。先生と一緒に KUCA で実験を行う機会はあまり多くはなかったのですが、先生が KUCA に訪れた際には装置のいろいろなことに興味を示されて質問されました。理系研究者の性かもしれませんが、気になったものには触ってみたいという感覚は先生も同じで、あるとき炉室での実験準備中に先生があるもの（触ってはいけないもの）をふと手にされたことがあり、近くに居た私が先生を強く制止したことがありました。先生はとっても申し訳なさそうにされ、その日は心なしか口数も少なくなりそれ以降炉室に入られなくなってしまいました。今思うと私が強く言いすぎたかなと反省しています。

仁科先生にお世話になったことの中で一番印象に残っているのは私の結婚式についてのことです。仁科先生には私たち夫婦の仲人をお願いしたのですが、式の 1 ヶ月ほど前にご挨拶のために家内と一緒に仁科先生のご自宅に伺いました。簡単なご挨拶だけと思っていたのですが、先生は結婚式の

進め方をかなり心配しておられ、その場で予行練習をすることになりました。リビングで先生と奥様、そして私たち 2 人で実際の立ち位置を確認し、その後の各自の動きも何度か練習して、ようやく先生に納得して頂くことができました。まさか練習されるとは思っていなかったのですが先生が大変几帳面な性格であることを実感したような出来事で、練習の成果もあり結婚式を滞りなく進めることができました。結婚後、名大に所属しているときは毎年先生の千種区または日進市のご自宅に伺い先生と奥様とゆっくりとお話する機会を持つことができましたが、ご自宅での先生は普段の厳しい感じの先生とは全く異なり、大変温和な感じで（こんなことを言っては大変失礼になるかもしれませんが）好々爺という言葉がぴったりだったように思います。

仁科先生には大変お世話になったという感謝の気持ちしかありません。炉物理が本当に大好きな仁科先生とお目にかかることができ、ご指導を頂いたことは幸せでした。

仁科浩二郎先生、有り難うございました。